

【 分散する台風の上陸日 】

江戸時代から伝わる天気のことわざに「**二百十日は農家の厄日**」があり、立春から数えて210日目の9月上旬は、台風が来ると開花期の稲に大きな被害を受けるため、農家に警戒を呼びかけていたのであろう。

戦後の大型台風の上陸はこの諺よりも遅く、9月16～17日と9月25～26日頃が比較的多い。前者の主な台風は枕崎台風（1945年）、カスリーン（1947年）、アイオン（1948年）、第二室戸（1961年）など。後者では13号台風（1953年）、洞爺丸台風（1954年）、狩野川（1958年）、伊勢湾（1959年）、26号（1966年）などである。

最近では、二酸化炭素にともなう温暖化の影響かどうかは不明だが、**台風の日本への上陸日が分散する傾向にある。**

東京で最大風速の極値（38.2メートル）を観測したのは、1979年10月19日の台風20号であり、今年は早々と二つの台風が7月に千葉県に上陸し、つい先日は13号が小笠原を通過した。

今から721年前の弘安4（1281）年8月に元の大軍が博多湾に襲来したが、8月22日の夜に突如襲った野分（台風）にともなう暴風雨のため、元の軍船の大半が沈没し戦いは終わった。歴史教科書で有名な**神風が吹いた**のである。

もし、フビライが日本の気象を調査して風の多い6月に攻めて来ていたら、時化による軍船の損壊などなく、我が国の歴史が大きく変わっていたかもしれない。

戦争や企業活動、ましてや農業においては、気象の調査が重要な仕事であることは昔も今も変わっていない。

（ 気象情報システム株式会社 高 津 敏 ）